

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

— 未指定文化財から県登録文化財へ —

小野 佳代

はじめに

二〇一四年に愛知県名古屋市にある東海学園大学に着任後、地域の仏像に目を向け、細々とではあるが仏像調査を行うようになった。二〇一七年に科学研究費補助金・基盤研究（C）「愛知県尾張地方の仏像に関する総合的研究——中央との関係と地域性——」（二〇一七—二〇二一年）に採択後は、春日井市や小牧市、犬山市、江南市、岩倉市、一宮市といった、いわゆる尾張地方の仏像調査を本格的に開始した。調査対象とした仏像は、寺院の宗派や製作年代に関係なく、過去に調査されたことのない仏像、いわゆる未調査、未指定の文化財であった。調査を始めた頃は、年に数体程度の仏像を対象としたが、徐々に調査する仏像の数も増え、今では年に百体近くを対象とすることも珍しくなくなった。気が付いたときには、岐阜県、愛知県、小牧市、春日井市、名古屋、各務原市の文化財保護審議会委員または文化財調査委員会委員となっていた。

今、改めて尾張地方の仏像調査を振り返ると、平安時代や鎌倉時代に遡る古い仏像も見出されたが、多くは室町時代以降の仏像であった。しかしこれは私にとって、かけがえのない経験となったのである。美術史学のとくに仏像彫刻の分野においては、飛鳥時代から鎌倉時代ま

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

での仏像を高く評価する傾向があり、南北朝・室町時代以降の仏像を対象に調査研究する者は意外にも少ない。大学の美術史の授業でも室町時代以降の仏像彫刻を取りあげないことも多い。つまり、美術史学の研究者が南北朝・室町時代以降、江戸時代までの仏像を学ぼうとしても、像の詳しい構造や技法が写真付きで公表された書籍や論文が極めて少なく、学ぶ環境が整っていないのである。したがって私自身もそうであったが、室町時代以降を真剣に学ぼうとするならば、自ら調査現場へ出ていくより他にはないのである。そのため尾張の仏像調査を始めた当初は手探りの状況で、調査や修復の経験が豊富な先生方から助言をいただきながら取り組んだものである。しかし、現場での調査経験が増えたことで、尾張地方の仏像の特徴や年代観についての自身自身の物差しが徐々に出来上がっていった。

二〇二三年四月からは、あらたに科学研究費補助金・基盤研究（C）「愛知県の仏像に関する調査研究——伝播と移動に注目して——」（二〇二二—二〇二六年）に応募・採択され、愛知県の尾張地方に限らず、その周辺地域の仏像を対象とした調査研究を開始した。愛知県は関西と関東をつなぐ交通の要衝に位置していたことから、両文化圏の影響を受けやすく、それが愛知県の仏像の特徴にもなっている。のこり四年の研究期間で、文化や技法の伝播、人や仏像の移動といった点を意識しながら、愛知県の仏像の調査研究に取り組む予定である。

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

さて、二〇二二年度は愛知県および岐阜県の延べ三十九カ寺を訪問し、七十三軀の仏像を視察・調査した。ここでは、一宮市妙興寺の仏像を紹介したい。二〇二二年五月二十二日、一宮市博物館主任（学芸員）の石黒智教氏より仏像調査の依頼があり、実査の運びとなった。当日は妙興寺の客殿（方丈）、仏殿、弁天堂の仏像を拝見したが、すでに指定になっている仏像はのぞき、未指定の像を中心に調査した。とくに優れた二軀の像、すなわち弁天堂安置の木造弁才天坐像と客殿安置の木造南無仏太子立像を調査した結果を報告する。

一宮市妙興寺の歴史について

妙興寺は愛知県一宮市大和町にある臨済宗妙心寺派の大寺院である。貞和四年（一三四八）に尾張国中島城主中島藏人の次男・滅宗宗興が亡き父母の恩に報いるために創建した寺院で、先師にあたる南浦紹明（円通大心国師）を勧請開山とした。伽藍は貞和四年より造りはじめ、十八年後の貞治四年（一三六五）に完成した。伽藍完成以前の文和二年（一三五三）、妙興寺は足利義詮の祈願所となり、延文元年（一三五六）には後光厳天皇の勅願寺となった。妙興寺の草創期の寺領は、総計百十八町七反におよぶ広大もので、一時は三百四十六町余もの寺領を有したほどであった。妙興寺は創建以来、室町幕府から厚遇され、諸山と同格に列せられてきたが、応永七年、十二年、二十四年と三度の火災に見舞われて堂塔伽藍の多くを焼失した。また室町幕府の勢力が衰えてきたこともあり、かつての寺勢を失っていった。

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀次の特命により、京都の妙心寺から名僧・南化玄興（定慧円明国師）が招かれ、再興を図った。妙興寺が法灯を維持できたのは、豊臣秀吉による三百石の寺領の寄進があり、慶長六年（一六〇一）には寺領が二百石に減額されたものの、江戸時代以降も歴代尾張藩主から二百石を安堵され、これが近世妙興寺の経

済的基盤となったからである。しかし明治時代になると寺領は没収となり、大きな打撃を受けた。さらに明治二十三年（一八九〇）に火災で諸堂が焼失、翌二十四年には濃尾大地震で諸堂倒壊の憂き目に遭ってしまった。しかし明治末から大正期にかけて諸堂は復興され、大寺院の姿を取り戻した。南から総門、勅使門、放生池、山門、仏殿がほぼ一直線上に並び建ち、周囲は広大な森に包まれ、京都五山に負けない風格である。

妙興寺は歴史上、火災や地震などの災難に幾度も見舞われているが、幸いにして後光厳天皇より賜った勅額「国中無双禅刹」を掲げる勅使門が現存する。また宝蔵も火災を免れ、貴重な古文書類や仏像、絵画などの宝物が伝わるのは誠に喜ばしいことと言わねばなるまい。

以下、火災を免れた未指定文化財、すなわち木造弁才天坐像と南無仏太子立像について紹介したい。

一、木造弁才天坐像（図1-8）

木造 玉眼 彩色 一軀 像高三一・七cm

〔形状〕

頭髮は地髪部では疎らにまとめ、七つの髪束を肩まで垂らす。頭上には翁面蛇体の字賀神をいただく。三道相をあらわす。大袖衣・襦袢・衣・背子・裙・腰布を着す。腕は八臂とし、左の第一手は鉤、第二手は宝輪、第三手は弓、第四手は宝珠、右の第一手は鉤、第二手は棒、第三手は箭、第四手は剣をとる。右足を外にして趺坐する。

〔法量〕（単位cm）

像高 三一・七（一尺八分）
髮際高 二三・〇（七寸六分）

頭頂—頸—宇賀神頭部をのぞく 一一・一

面長	七・三	面幅	五・八
面奥	八・三	胸奥	七・六
腹奥	一八・八	肘張(袖)	一七・六
膝張	二三・五	膝奥	一五・八
膝高(左)	四・五	膝高(右)	四・五
坐奥	二〇・〇		

〔品質構造〕

檜材。寄木造り。彩色。玉眼嵌入。宝冠・鳥居・冠繪・以上銅製鍍金。瓔珞・垂飾が付属。

像表面に現代の彩色が厚く塗られているため、構造が判然としないが、次のように推測される。頭体幹部は前後二材短ぎ。内割りを実施し、三道下で割首するか。宇賀神は別材短ぎ。体幹部前面材には像心束を彫り残す。この体幹部材に、両体側部材・腰脇部材・両脚部材・裳先・両脚部の底板・八臂を別材で短ぎ。八臂のうち屈臂する腕は肘でさらに別材を短ぎ。

像表面は白下地、彩色仕上げ(現状、灰色仕上げ)。頭髮の毛筋、眉、着衣部の唐草文様、頭上の宇賀神の元結紐、頭髮の筋、髭等は金泥で描く。唇は朱彩(宇賀神の唇も同様)。瞳は黒、その周りの黒目は茶。白眼白。目頭・目尻を朱でばかす。

〔保存状態〕

両腰脇材、体幹材背面の下部、両脚部の底板(および底板の内側の補材)、像表面の彩色のすべて、玉眼、宝冠、台座(下から框座、岩座、荷葉座)・光背(輪光)、以上後補。八臂および持物も後補か。

〔考察〕

妙興寺弁天堂に安置される。頭上に翁面蛇体の宇賀神をいただく八

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

臂弁才天坐像である。檜の寄木造りの技法で作られた像高三一・七cm、玉眼、彩色仕上げの小像である。本像は面幅が広く、頭部も四角く、髪際のラインも角張っており、また脚部にうねりのある曲線の衣文をつくり、像底には像心束を彫り残している。これらの様式、技法上の特徴はいずれも南北朝時代を代表する院派仏師の仏像にみられるものである。補修箇所がやや多いのが残念ではあるが、本像は院派系統の仏師による南北朝時代の作と推定される。

ところで妙興寺仏殿の本尊、木造釈迦如来及両脇侍坐像が院派仏師の作であり、両脇侍像の頭部内から「院遵」の墨書が見つかっている。院遵とは南北朝時代の院派仏師を代表する院吉の子(または弟子)と考えられている人物である。院吉は足利氏の菩提寺・等持院の本尊地藏菩薩像を造立して等持院大仏師となった人物で、足利尊氏・直義という最も強力な後援者のもとで造像活動をしていた仏師として知られている。当時、室町幕府と結びついて活躍していた院派仏師が妙興寺本殿の本尊像を造立し、さらに同派の特徴をもつ弁才天坐像が妙興寺に現存するのは大変に興味深い。

ここで弁才天の意味について少し触れておきたい。弁才天とは仏教の守護神である天部の一つで、サンスクリット語ではサラスヴァティー(Sarasvatī)といい、大弁才天女、妙音天、美音天などと訳される。古代インドのサラスヴァティーは河の名前であったが、神格化されて学問、叡智、音楽の女神となった。日本で弁才天の像を河や池など水辺に祀ることが多いのは、河の名を起源とする神だからである。このたび調査した弁才天像も妙興寺境内の池近くの弁天堂内に祀られている。

弁才天は護国經典の『金光明最勝王經』などに説かれ、古く奈良時代から造像例があり、最古の例としては東大寺旧法華堂安置の塑造八臂弁才天立像があげられる。ただし、本像は奈良時代の弁才天像とは異なり、中世以降に誕生した宇賀神と結びついた弁才天、すなわち宇

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

賀弁才天像である。宇賀神は蛇形に変わって人の前に現れるといい、また蛇神や龍神とかかわりも深く、稲荷神ともつながり、福德神としての性格が強い。この宇賀神と結びついた、日本独自の弁才天像は『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』など弁天五部經に説かれるが、いずれも日本で撰述されたものである。これらの經典によると、宇賀弁才天は手には鉾、輪、弓、宝珠、劍、棒、鑰（鍵）、箭をとること、また頭頂に白蛇（宇賀神）と華表（鳥居）を戴くという。手に宝珠と鍵をとることで、福德・財宝神としての性格が強調され、人々に信仰されるようになった。

宇賀弁才天の作例は日本各地に現存するが、鎌倉時代や南北朝時代にさかのぼるものは多くない。そのような中で、本像のように南北朝時代の院派系統の仏師による宇賀弁才天像が現存するのは貴重である。修理箇所がやや多く、表面彩色が現代のものであるのが惜しまれるが、院派系統の仏師作としては貴重であり、ぜひ後世に伝えていくことが望まれる。

二、木造南無仏太子立像（図9-18）

木造 玉眼 漆塗り 一軀 像高三三・八cm

〔形状〕

頭部を円頂とする童子形。上半身は裸形とし、下半身に長袴を着し、合掌して立つ。袴の裾は背面で後方に引く。太子が数えて二才の春、東方を向いて合掌し、「南無仏」と唱えたという伝記に基づく造像。

〔法量〕（単位cm）

像高	三三・八（一尺一寸二分）
頂一顎	七・八
面幅	四・七
耳張	六・五
面奥	六・三

肩張	一〇・〇	肘張	一一・二
胸奥（左）	五・八	腹奥	六・〇
膝張	八・八	膝奥（左）	四・七
裾張	一二・二	裾奥	七・〇

〔品質構造〕

檜。割矧ぎ造り。現状、漆塗り。玉眼嵌入。

頭体幹部は両腕の肘までを含んで一材から彫出し、両耳の後ろを通る線で前後に割矧ぎ、内割りをはどこして割首する。さらに両肩および面部でも割矧ぐ。両肘より先（前膊・手首先）、袴の裾に別材を矧ぐ。像本体と台座が接着されており、像底の観察は不可。

表面は白下地、漆塗り。

〔保存状態〕

像表面は現状では漆塗り。漆層の下に白色のほか、朱の彩色が見える箇所がある。当初は彩色仕上げ。両肘より先（両手首先を含む）、袴の左裾先、像表面の漆塗りと白下地、台座（須弥座形。漆箔、朱漆）、以上後補。袴の右裾先を欠失。

〔考察〕

客殿の須弥壇上の小厨子内に安置される。上半身を裸形とし袴を着けて合掌する通例の南無仏太子像である。像高は三三・八cmという小ぶりなサイズで、檜の割矧ぎ造り、玉眼嵌入、現状は表面が漆塗りの像である。頭部がやや大きい、童子の体形としてはバランスのよい体軀にあらされる。ふっくらとした頬には張りがあり、目は左右で輪郭線が少し異なり、わずかにつり目とする。口をしっかりと結び、正面を見つめる表情は凛々しく、生気がこもる。目鼻立ちが顔の中央に集まっているのも特徴的である。

本像の合掌する姿は十世紀に撰述された『聖徳太子伝暦』³に記された、二歳の太子が東方を向いて合掌し「南無仏」と唱えたという伝記に基づくものである。また鎌倉時代前期に法隆寺僧の頭真が記した『古今目録抄』などによると、太子が誕生以来握っていた仏舎利が掌中より出現したことを記しており、よって太子二歳像では合掌した手の間に隙間をつくる作例が多い。残念ながら、本像の合掌手は後補である。

『吾妻鏡』承元四年（一一一〇）十一月条をみると、源実朝（一一九二―一二一九）が持仏堂で南無仏太子像を供養したことが記されている。実はこれが単独の南無仏太子像が製作されたことがわかる史料上の初見である。鎌倉時代は聖徳太子信仰が隆盛した時代でもあり、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて数多くの太子像が製作された。とくに元享元年（一一三二）の太子七百回忌を中心に盛り上がりを見せたことが知られている。

たとえば、兵庫・善福寺に伝わる慶派仏師の湛幸作の南無仏太子像（十三〜十四世紀、図19）、大阪・香雪美術館の南無仏太子像（十四世紀、図20）は鎌倉時代後期の作例であるが、広島・浄土寺の院勢作の南無仏太子像（建武五・一三三八年、図21）は南北朝時代に入ってからのごの作例である。本像と比較すると、顔の表情は香雪美術館像や広島・浄土寺像に近く、袴の表現は浄土寺像に近い。以上から本像は鎌倉時代後期から南北朝時代頃の製作と推定される。

ところで、私が妙興寺の南無仏太子像を調査するに先立ち、椋山女学園大学の見田隆鑑氏が本像を実査し、その報告が最近出されたことを知った。見田氏が推定した本像の推定年代は鎌倉時代後期から南北朝時代であり、私と同様である。ただし見田氏によると、愛知県内の指定になっている南無仏太子像の多くが真宗寺院に伝わっており、妙興寺の仏像や仏画には他寺から伝わったものもあることから、本像も他所から移された可能性も考えられるという。しかし一方で、中世妙興寺における太子信仰や舍利信仰の姿を伝える尊像であった可能性も

あることを指摘する。結局のところ本像には銘がなく、現状ではそのどちらかは判じがたい。ただ、本像は顔の表情をはじめ見どころのある優れた太子像であり、像の製作された推定年代が妙興寺創建の貞和四年（一三四八）と近いのは気になることである。創建期の院派系統の仏師が手掛けた像である可能性も捨てがたい。多くの聖徳太子像の像内から墨書名や納入品が見つかっていることから、今後本像を修理する際には注意されたい。

おわりに

このたびの調査で、一宮市妙興寺には未指定ながら寺院創建期に近い時期の弁才天坐像と南無仏太子立像が伝存することが確認された。妙興寺には仏殿の本尊・木造釈迦如来及両脇侍坐像をはじめ、客殿の本尊・如意輪観音坐像が同じく南北朝時代の像であり、これらの像は一宮市の指定文化財となっている。このうち仏殿の本尊像は、先述のとおり院派仏師の「院遵」銘のある貴重な像で、極めて保存状態が良く、また妙興寺の歴史を語る上でも重要な像であることから、近く市指定から県指定にするよう答申される予定である。このたび調査した弁才天坐像と南無仏太子立像の二軀もそれと近い時期の像と推測されるが、誠に惜しいことに保存状態が良いとは言えず、当初の彩色も残っていない。したがって現時点では一宮市の指定文化財にするにもやや難しい状況にある。しかしながら、二軀ともに妙興寺の歴史や信仰を考えるうえで重要な像には変わりなく、ぜひとも保護され、後世に伝えていくべきである。

二〇二三年四月より愛知県では新たに文化財登録制度がスタートする。対象となるのは、国の登録文化財と同じ五つの種別、すなわち有形文化財、無形文化財、有名民俗文化財、無形民俗文化財、記念物である。しかも、地方指定文化財以外のものが対象となる。つまり、市

一宮市妙興寺の弁才天像と南無仏太子像

町村の指定になるものは対象外で、今回調査した仏像のように市の指定には届かない未指定文化財が対象となる。よって、妙興寺の弁才天坐像と南無仏太子立像の二軀を今後、愛知県の登録有形文化財にしていきたいと考えている。

近年、文化財の保存と活用という言葉聞くようになった。私の関係する自治体でも、地域の寺院調査や文化財指定に積極的になってきた印象を受ける。今後ますます地域の未指定文化財をどうすべきかが議論されることになるだろう。未指定文化財を日々調査する者としては、このような機運が生まれたのは喜ばしく、新たに始まる県の文化財登録制度にも期待したい。

〔註〕

- (1) 妙興寺の歴史は『新編 一宮市史』資料編補遺二、妙興寺文書(一宮市、一九八〇年)、河野宗寛編『妙興寺誌』(長嶋山妙興報恩禅寺、一九六五年)等を参照した。
- (2) 弁才天については、根立研介『日本の美術』三一七 吉祥・弁才天像(至文堂、一九九二年)、笹間良彦『弁才天信仰と俗信』(雄山閣、二〇一七年)等を参照した。
- (3) 『聖徳太子伝暦』(『大日本仏教全書』一一二 聖徳太子伝叢書、仏書刊行会、一九二二年)。
- (4) 『吾妻鏡』承元四年(一二二〇)十一月条(『国史大系』新訂増補、吉川弘文館、一九六八年)。
- (5) 見田隆鑑『大学と地域博物館の連携による文化財の保存・活用に関する研究』(『文化情報学部紀要』二二、椋山女学園大学、二〇二二年)。
- (6) 私自身が現在、愛知県文化財保護審議会委員であり、仏像彫刻の諮問・答申を担当している。

〔図版出典〕

図1 18 高橋寛撮影。

図19 『千四百年御聖忌祈念特別展 聖徳太子 日出づる処の天子』(大阪市立美術館、サントリー美術館で開催の展覧会図録、日本経済新聞社、二〇二二―二〇二三年)。

図20・21 『聖徳太子展』(東京都美術館、大阪市立美術館、名古屋市美術館で開催の展覧会図録、NHK、二〇〇一年)。

〔付記〕

本研究報告は、二〇二二年度の学研費補助金・基盤研究(C)「愛知県の仏像に関する調査研究―伝播と移動に注目して―」の研究成果の一部です。一宮市妙興寺の仏像調査に当たっては一宮市博物館主任(学芸員)の石黒智教氏、また後日、十月二十八日の写真撮影にあたっては妙興寺の塔頭・來薰院住職の平松良順氏にお世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

また図19 21は出典に記載のとおり、展覧会図録より転載させていただきます。

プロフィール

東海学園大学人文学部教授。博士(文学・早稲田大学)。専門は日本彫刻史。愛知県・岐阜県の文化財保護審議会委員を務める。東海印度学仏教学会理事。



図1 弁才天坐像 全体



図2 弁才天坐像 正面



図3 弁才天坐像 背面



図4 弁才天坐像 左側面



図5 弁才天坐像 右斜側面



図7 弁才天坐像 脚部



図6 弁才天坐像 頭部正面

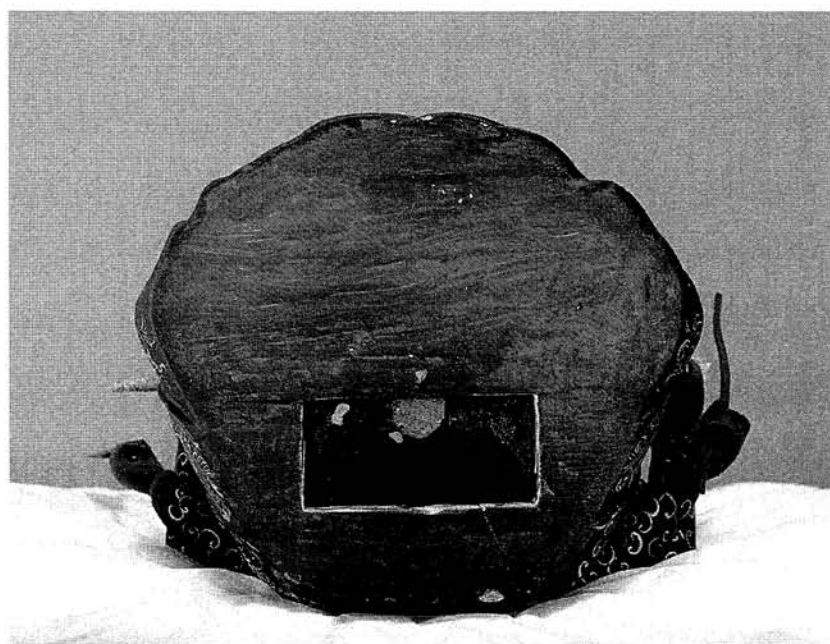


図8 弁才天坐像 像底

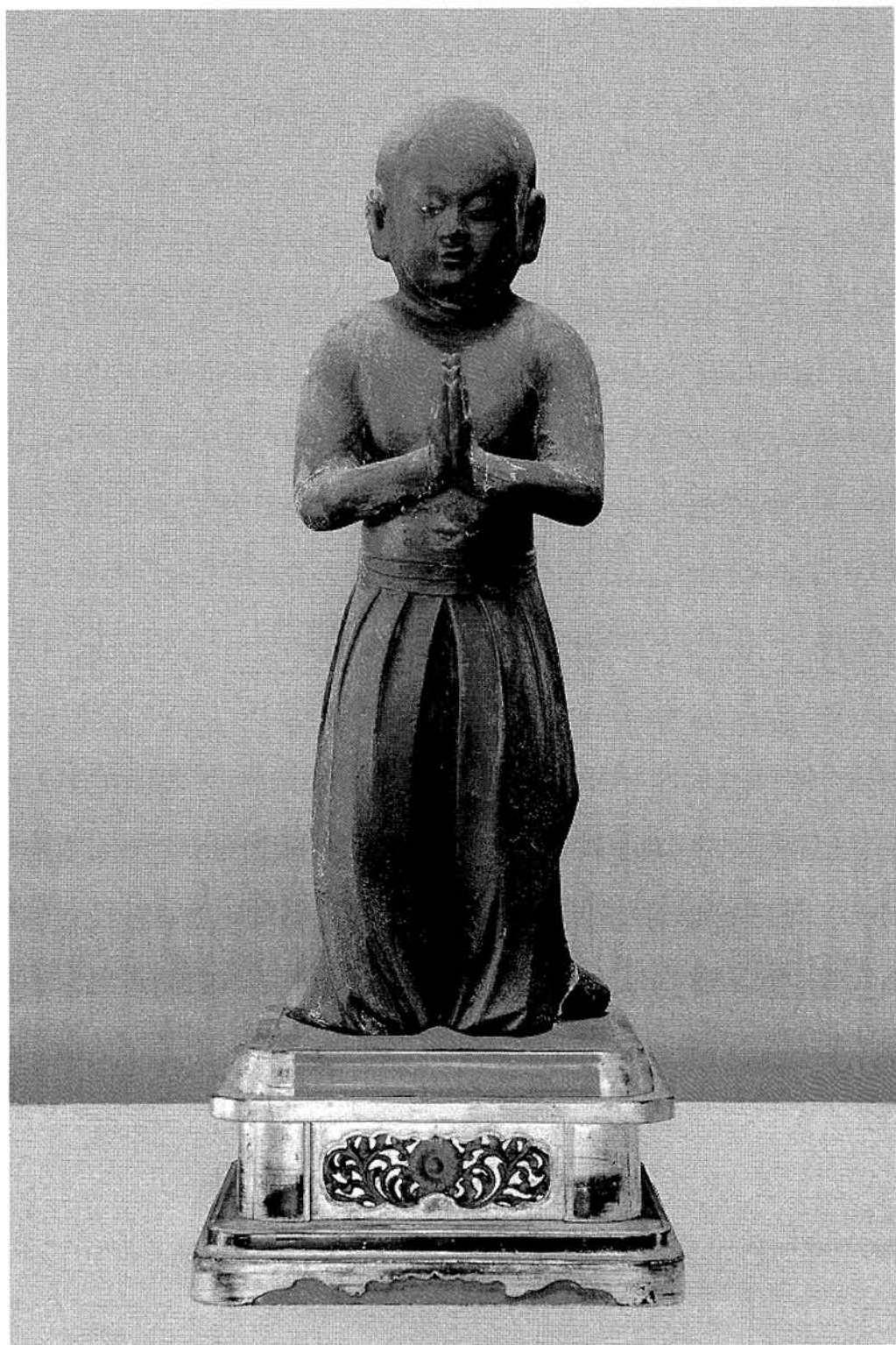


図9 南無仏太子立像 全体



図11 南無仏太子立像 右側面



図10 南無仏太子立像 左側面



図13 南無仏太子立像 背面



図12 南無仏太子立像 左斜側面

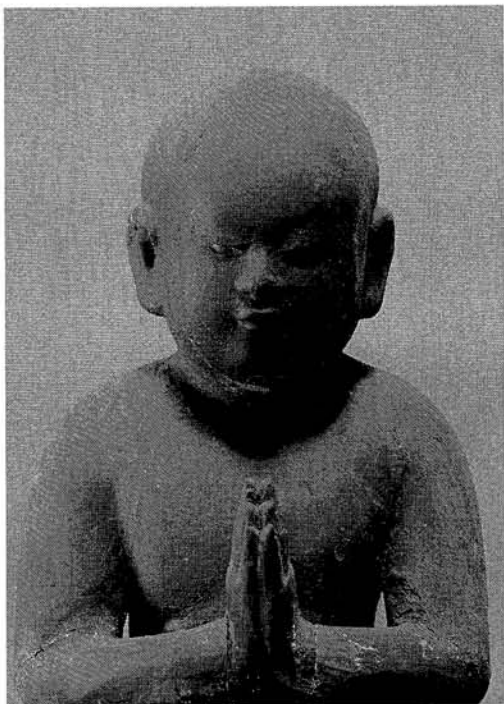


図14 南無仏太子立像 上半身正面



図15 南無仏太子立像 上半身背面



図16 南無仏太子立像 上半身左側面

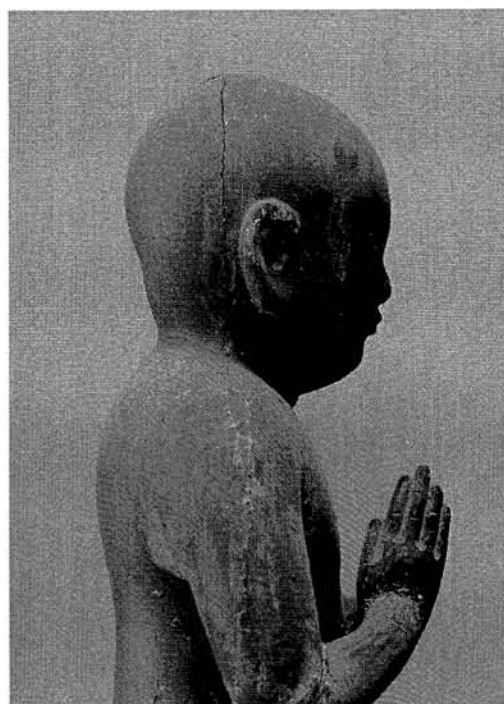


図17 南無仏太子立像 上半身右側面



図19 兵庫・善福寺
湛幸作（13～14世紀）

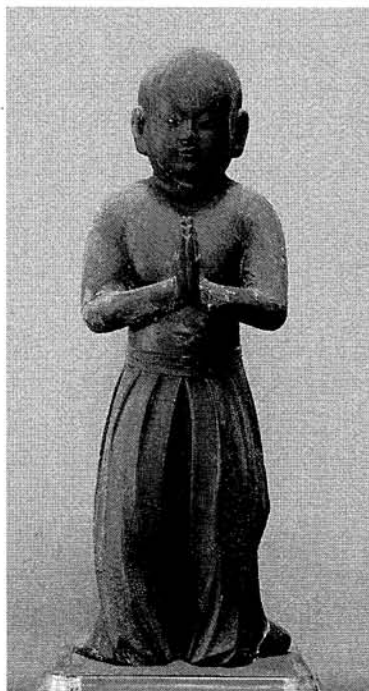


図18 妙興寺客殿



図21 広島・浄土寺
院勢作（建武5・1338年）



図20 大阪・島香雪美術館
（14世紀）